

＜＜特定非営利活動法人鳳雛塾＞＞

ビジネススクールケース教材

株式会社とっぺんの技術経営

TOUSSU

株式会社とっぺんの概要

株式会社とっぺんは、佐賀県佐賀市を拠点とし、「価値ある情報を多くのひとへ」という経営理念のもと、文化財調査をデジタル技術で支援し、それを広く社会へ届けることを使命としている。創業以来、従来の紙・フィルムによる記録方法とデジタル記録の比較を重ね、メリットとデメリットを検討しつつ、最適な提案を行ってきた。調査現場で得られた高品質データは、博物館や資料館、イベント展示などに活用され、多くの人々に「価値ある情報」を身近に感じてもらえる仕組みづくりを目指している。

事業は次のように大きく二つに分かれる。ひとつは文化財事業で、デジタルアーカイブ、三次元計測、写真や映像の撮影、報告書作成支援、調査・研究支援、レプリカ作成など、調査と記録にかかわる幅広い業務であり、もうひとつはコンテンツ・展示企画事業で、VR/MR、360°撮影、3DCGなどの先端技術を活用したデジタルコンテンツ制作、展示デザイン、インタラクティブ体験の企画・制作など、参加者の興味をひく体験型コンテンツづくりに注力している。

とっぺん創業と経緯

2006年（平成18年）7月13日、佐賀市神園にて武廣正純氏により「株式会社とっぺん」が創業された。創業当時のコンセプトは「デジタルアーカイブ」で、文化財の調査・記録を中心に、デジタル技術を駆使し「価値ある情報を多くのひとへ」という理念を掲げてスタートしている。

武廣氏は元々文化財の総合コンサルティングを行う株式会社埋蔵文化財サポートシステムの役員であり、同社のデジタル事業関係の技術者でもあった。遺跡発掘現場のようなところは、元々非常にアナログな環境下での作業であり、図面は鉛筆と方眼紙で手書き、保存媒体もフィルムを使うというような業界だった。そのデジタル化をけん引していた武廣氏はそこから独立し、とっぺんを創業した。

設立後間もなく、2007年には日本学術振興会の科学研究費助成事業「VR画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築」に参画。これは独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館を中心に、河野一隆氏らが研究代表者となり、KAKENhi（化学研究費）の研究プロジェクトとして2010年までの3年間に渡る取り組みで、同社の技術的飛躍と発展の基盤となった。

その後、2008年には本社を佐賀市呉服元町に移転し、佐賀県地域産業支援センターのインキュベートルームに研究室を設置。さらに2010年には、研究機能と本社機能を統合し、新たに佐賀市鍋島町八戸へ移転して体制を強化した。

天賀光広氏の経歴

2017年5月、同社は福岡支店を福岡市に設置し、9月に常務取締役の天賀光広氏（当時40歳）が代表取締役に就任、武廣正純氏は取締役会長に就任した。



天賀氏は福岡から大学入学を機に佐賀に移住、最初は建設系のコンサルティング会社でコンサルティング部門に従事し、その後は薬品会社の営業職に転職した。元々理系であり、当初は土木系コンサルティングに従事していたが営業職になった背景には学生時代の経験があったからだという。

天賀氏の学生時代は2000年前後で、日本でもインターネットが普及し始めた時代にあたる。その頃、天賀氏は友人たちと個人事業レベルでインターネットおよびNTTドコモのiモードにも対応した地域のポータルサイトを開設していた。2～3年やっていく中で、広告費が事業収入として入ってくるようになっていたが、継続的な事業運営を行う上で営業力が不可欠であることを痛感したという。コンサルティング会社に入ってからそのことが常に頭にあり、ハードな営業といえば薬品会社の営業であろうと考え、転職し営業スキルを身につけるべく働いた。

そういう動機であったため、長くても営業は3～5年ほど続けてそこで転職をと考えていたが、とにかくハードな仕事ゆえに後輩たちが次々と入ってきては辞めていく状況の中、仕事のやり方等で疑問や衝突も多く想定よりも早く2年ほどで退職することになった。

年度途中の8月で仕事を辞めたため、ちゃんとした仕事は期が変わる翌年4月からかと考えていたが、とりあえずその間に何もしないのもと、そこでたまたま見つけたのが吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所での仕事だった。ちょうど9月から3月までの半年間の契約期間の仕事であり、元々歴史も好きだったこともあって、そこで働く間に次の仕事を見つければ良いと考えていた。発掘調査事務所での仕事は、経年劣化しやすい発掘資料や記録などの紙媒体、フィルム類をデジタル化する作業で、そこをとっぺんの創業者である武廣氏が当時勤務していた埋蔵文化財サポートシステムが請負、同社からの派遣という形での採用だった。

ところが契約期間の半年が経とうとするその間に、天賀氏は当時「ミスター吉野ヶ里」と言われた七田忠昭氏（現佐賀城本丸歴史館館長）からもう少し事務所において続けてくれないかと慰留され、今度は県庁の嘱託職員として勤めることになる。とはいえ、嘱託職